
紅茶の雨は止まない

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅茶の雨は止まない

【Nコード】

N7374L

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

フランスさんが雨とすっぱい紅茶にもんもんする話（きっと嘘はついてないW）

（前書き）

今回はフランスとイギリスの話です。…と行ってもイギリスは実際に出ていないのですが。

最近雨ばかりですね

私は雨は好きなのでこんな話を思いついてしまいました

静かな雨の日に読んで頂きたい一品です

窓の外をみると雨はただ静かにアスファルトを濡らしていた

「…おふつ。」

あくびの余韻さえも湿り気をおびる5月の末

フランスはただ一人自宅で止まない雨を眺めている

「あ、そついやデート」

がたん、と立ち上がって腕時計をみるとすでに約束の時間を20分も過ぎていた

俺らしくもない。

「やつば」

ふと携帯のディスプレイが点滅しているのに気がつく

着信が一件

開くと留守番電話のようだ

”もしもし、フランス？私、待つのは嫌いだって知ってて遅れるのね？雨だし。今日は帰るから。次に会ったときは美術館の前の高級レストランで食事よ、いいわね！！じゃあ”

早口でまくし立てるような声

尖ったハイヒールをかつかつとならして憤慨しながら帰っていく彼女の姿が目には浮かぶ

「ごめん、リディアン」

フランスは苦笑いをして携帯画面に軽くくちづける

まるで相手の携帯を通して彼女のふくれたほほを撫でるように

「雨やまないなあ」

木製のアンティークの椅子に再び深く腰掛ける

ぼんやりしていると不意に寒気がして思わず「さむっ」と呟く

…ん

はあっと息を吐くとあろうことか白く刹那の間形を留めた

「おいおい、嘘だろ。5月も末じゃなかったっけ」

フランスはたまらず立ち上がるとなにか暖かいものでも飲もうかとケトルに火をかける

「〜」

鼻歌を刻みながらティーセットを引き寄せる

「…ん？」

フランスは見慣れない形の瓶に入った茶葉を手にとった

「なんだっけ、こりゃ」

コルクを抜き、瓶の口から手で仰いで茶葉の香りをかぐ

紅茶…であるのは間違いないが…すっぱい匂いがする

「ああ」

あれ、かあ

記憶に触れたのは4日前のこと

フランスはケトルのなかの湯から泡が浮かぶのを見つめるともなしに見ながらぼんやりと回想を始める

- - - - -

「フランスーいるか」

「暇だなあ、お前も」

そういえば4日前も雨だった

今日のようなしとしと続くものじゃくて、激しいものだった

急に会議の帰りに寄るからというイギリスからの電話がきたのは本人の到着の10分前。

丁度雨が降り出したところだから、雨宿りでもするつもりなんだろうかと思っていた

「あがれば？」

親指で暖まった室内を指す

が、イギリスはふるふると緩く首をふった

「いや、すぐに帰らなきゃなんだ。家にまだ仕事が残ってる」

呼吸や、少し顔を上下させる些細な動作の度、髪からは絶えず雨の玉がぼろぼろと落ちていた

傘を忘れたのだろうか

傘を貸そうかと言い出す前に、イギリスは脇に置いていた黒いビジネスバッグを開くと麻の袋に黒と紺と薄いブルーのストライプのりボンがかかった物を大事そうに取り出した

「なんだいそれは」

「いいから開けてみるよ」

イギリスは得意げに笑う

フランススは「ふん？」と鼻から息をつくとりボンを慎重にほごき、中から瓶をとりだした

「…紅茶、か？」

「ああ」

へえ、と瓶を眼下で横に僅かにふったあとコルクを外した

その瞬間蔓延するすっぱさ

あれ、紅茶ってこんなにすっぱかったっけ？…んなわけない！！

「イギリスでめー。なんつーもんをくれちゃってんだ？」

フランススは青筋を浮かべて微笑む

こいつはいつも俺になにかと罖を仕掛けて来る、気をつけないければひどいめにあう

この紅茶は俺に腹痛でも起こさせてそれを大笑いするためにちがいない

「な！！すごいだろ？」

え

フランススは少し戸惑った

彼が考えてたのはしたり顔か、または早くに計画がばれて焦る顔のどちらかだったから

まさか、満面の笑みを浮かべられるとは…

「最近うちで作り始めてるんだ。紅茶の茶葉を乾燥させてな、一回林檎の酢に漬けて込んで、もう一度乾燥させるんだ」

「はあ」

フランスは茶畑で林檎酢のすっぱさにむせ、涙目になりながら茶葉を乾かしていくイギリスの様子を思い浮かべた

「また変なもん作るなあ」

「変なもんってゆーな!!」

「や、十分変だろ。なんで一回酢に漬ける必要があるんだよ。お前はほんと味音痴だな」

「…」

イギリスは下を向いたかと思うとフランスの持っていた瓶を強引に奪い取った

「おい」

「いらないうらないんだ」

「いらなんなんて一言も…」

イギリスは急に肩を落とした

その隙に乗じて瓶を奪い返したが、あいつは抵抗しなかった

「帰る」

ドアを開けて背中をむけたままイギリスは小さく呟いた

「ま、待てって。いまタオルもってくるから頭拭いてけよ」

フランスは急いでタオルをとりに向かう

あのままだと風邪をひいちゃう

バスタオルと換えのワイシャツとズボン、大きめの傘を持って玄関に立ったときに、すでにイギリスの姿はなかった

「あいつ…」

フランスは前髪をかきあげたため息をつく

「そんなつもりじゃ、なかったのにな」

壁に寄り掛かり紅茶の入った瓶をつまみ上げる

瓶は細く、額に当てると無機質で、ひんやりと冷たい

あいつの細い腕も、首も。

今頃冷たくなってるんだろうな

磨りガラスの向こうから激しい雨の音が続いている

ワイシャツや髪が肌に張り付いてそれを不快に思いながら足速に歩いていく、そんな後ろ姿を容易に思い浮かべられた

「…ああもう」

瓶を見ていると割ってしまいたい衝動に駆られた

だが不思議なことに、いつも一緒にいるイギリスが、瓶を割ったと同時に消えて無くなってしまうような気がした

雨は止まない

まだ止まない

早く止んでくれよ

あいつ、傘もってないんだ

フランスは祈るように

雨の最後の一粒が落ちるまで

玄関に立ち尽くしていた

- - - - -

フランススは沸騰しすぎてこぼれた湯をみて我にかえた

慌てて火を消してこぼれた湯の跡を拭く

そして、少し逡巡したあとイギリスの紅茶をケトルに入れ、マグカップに静かに注いだ

途端に広がる…紅茶にあるまじき酢の匂い、うへえ…

匂いに辟易しつつも、そつとカップを傾けて一口飲み下す

「…!!ぐ、ぐへっ、げば」

激しく嘔せる

そのすっぱさは酸味と呼ぶのも躊躇うほどに常識から掛け離れていた

「ゝあいつ、やっぱり味音痴」

舌がまだ僅かに痺れる

残りは流しに捨ててしまおうと思いつ

「…」

マグカップから紅茶が零れおちる瞬間にフランススは手を水平にも

どした

「…ったく。ほんつとに」

悪態をつきながらフランスはまだ熱いそれを一杯飲み干した

そして空のマグカップに再び紅茶を並々とそそぐ

もう一杯

もう一杯

沸かし過ぎたお湯に後悔しながらも次々にカップを空ける

「もう無理だ…」

結局八杯の紅茶を飲んだ

熱さは二杯目から感じなかった

すっぱさは四杯目から火傷でやられた舌が緩和してくれた

水っ腹を抱えて椅子に腰掛けると喉元まで紅茶が競り上がる感覚に
生理的な涙が零れる

「ふざけてる」

涙はとまらない

「なんの拷問だよ、これ」

涙がとまらない

フランスは磨かれた窓に映る泣いている自分を見て、慌てて袖口で目尻を乱暴に拭う

「なんか変な薬でもはいつてんじゃねえかな」

悲しくなんてないのに

拭いてもキリがなく、次から次へと沸く涙に面倒臭さを覚えて流れるがままにしておいた

泣いている時特有のぼうつとした感覚に襲われて

ふいに、今、自分は何歳だったかな、と思った

思えば遠くまで来た

たくさんの国に出会った

たくさんの国が消えた

潰したことがあった

潰されかけたことがあった

周りは目まぐるしく変わった

自分ももしかしたら昔の自分ではないのかもしれない

「でもよ」

フランススは一人笑う

「あいつは変わんねえな」

涙はなぜかとまらないけれど、
それでも笑いが込み上げる

「変わらない、ぜんっぜん」

あいつの料理は昔からまずい

あいつの髪は昔から癖毛だ

たしかに

あいつは背が大きくなったし、
強くなったし、

最後には俺を追い越した

それでもなんでだろう？

あいつは驚くほどに、

” 変わらない ” んだ

フランススは脇の机から電話を引き寄せる

「えーっと」

ダイヤルを回しながらフランスはいつのまにか雨は止んで、5月
相応の柔らかい夕暮れを迎えていたことに気づく

呼び出し音が耳に直接ひびく

あいつは

今日はなに食ってなに飲んで
誰と話をしたただろう

まだ怒ってて、すぐに電話を切られてしまっかも知れないけど

それでも、あいつの声が
今。 たった今、聞きたい。

「もしもしイギリスか？紅茶がきれたから持ってきてくれよ」

フランスは気づいていない

雨が夕焼けに代わったように

いつのまにか彼の涙もまた、
笑顔に代わっていたことに

- - - - - F i n - - - - -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7374/>

紅茶の雨は止まない

2010年10月9日16時21分発行